

國學院大學學術情報リポジトリ

近世儒仏論争史における『旧事大成経』の位置： 「聖皇本紀」學問関連記事を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大学院文学研究科神道学専攻 公開日: 2025-02-28 キーワード (Ja): 旧事大成経, 聖皇本紀, 學問, 近世儒仏論争, 排仏論 キーワード (En): 作成者: 菊池, 圭祐 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001396

近世儒仏論争史における『旧事大成経』の位置

——「聖皇本紀」學智関連記事を中心に——

菊池圭祐

一、はじめに

『先代旧事本紀大成経』^[1]は延宝七年（一六七九）に出版され、撰者を聖徳太子に仮託した偽書である。また出版後間もなく廃版処分となり、関係者と思しき人物たちも処罰されるなどした曰く付きの資料でもあり、現在この『大成経』が近世思想史上に適切な位置付けがなされ、十分に価値が見出されているとは言い難い状況にある。しかし、『大成経』は廃版処分となった後にも多くの信奉者たちの間で受け継がれ、様々な影響を与えていたことがこれまでの研究の中で次第に明らかになってきている。

従来の研究においては、その偽作に関わったと思しき人物たちや、『大成経』を受容し影響を受けていると考えられる人物に関してといった、『大成経』そのものに対する研究というよりは、その周辺の人物関係や出来事に

強い関心が向けられてきた。その一方で、肝心の『大成経』本文に関しては、詳細な読解といった基礎的な作業が未だ十分に行われていない嫌いがあり、また、本稿において考察の対象とする内容に関する先行研究は現在まで存在していない。そのため本稿では、『大成経』本文の読解を中心としつつ、それが内包する思想内容の一端を明らかにし、かつそこに表れた思想が後世にどのような影響を与えていたのかを明らかにしてみたい。

今回、中心的に取り扱いたいのが、七十二卷本『大成経』内の「聖皇本紀」という近世太子伝的内容を持つ一つの章である。「聖皇本紀」は、聖徳太子の事績を漢文編年体で記したもので、主に『聖徳太子伝暦』の記事を基礎としつつも、かなり多くのオリジナルな記述を含むものでもある。そのため『大成経』において新たに追加された記述に注目し、その点を詳細に検討することは、『大成経』が何を伝え、主張するために成立したものなのかを知る上で重要な視点であると考ええる。

そして数ある「聖皇本紀」オリジナルの記事の中から私が注目したのは、従来の太子伝等に聖徳太子の儒教の師である人物としてその存在が示されてきた「學智」という人物に関する記述である。學智は『大成経』以前の資料においてはあまり重要視されていなかった印象のある人物ではあるが、一方で「聖皇本紀」において學智は、多くのオリジナルな記事と共に積極的に聖徳太子と交流し、かなり存在感のある人物として新たに描き出されている。従って本稿では、「聖皇本紀」における學智関連記事の読解を通じて、ここでは學智がどのような役割を持った人物として描き出されているのか。また「聖皇本紀」オリジナルな内容としての學智と聖徳太子の交流には、どのような『大成経』撰者の意図が存在すると考えられるのか、といった問題について考察を行っていきたいと思う。

二、學智という人物について

夏四月。高麗の遣使調を貢す。並に博士學智を貢す。是の博士は異人なり。去年太子。其人有りと聞て。密に

皇子に申し。勅を以て之を召す。故に今來朝す。

〔『先代旧事本紀大成経』聖皇本紀 敏達天皇四年夏四月条〕⁽²⁾

三月。太子天皇に奏して曰く。高麗の学智は。異人なり儒を能す。庶幾くは拜して師として。西儒を学ん。(中略) 学智を宮に拜し。師と為し習學す。

〔『先代旧事本紀大成経』聖皇本紀 敏達天皇十三年三月条〕⁽³⁾

「聖皇本紀」における學智関連の記事の最初が、敏達天皇四年夏四月条である。これによれば學智は高句麗の人であり、儒教に精通した博士であったとされている。またこの學智の来日は、前年に聖德太子が學智の存在を耳にして皇子（聖德太子の父である橘豊日尊、後の用明天皇）を通じて呼び寄せたものであるともされている。

そして続く敏達天皇十三年三月条では、聖德太子が自ら學智に師事したいと敏達天皇に申し出たことが記されている。「聖皇本紀」ではこの記事から、聖德太子と學智が師弟関係にあり、儒教を学んでいたことが明らかにされている。

これに対して、『大成経』以前の資料では學智に関してどのような記述がなされているのかを確認してみたい。

夏四月庚午朔己卯。厩戸豊聰耳皇子を立て皇太子と爲す。仍て政を録攝しむ。萬機を以て悉に委ぬ。橘豊日天皇の第二子なり。(中略) 且つ内教を高麗の僧惠慈に習ふ。外典を博士覺智に學ぶ。並びに悉く達たまひぬ。

〔『日本書紀』推古天皇元年夏四月条〕⁽⁴⁾

外書の師は博士學架等。内典の師は惠慈。高麗之人なり。

（『聖德太子伝暦』敏達天皇五年条 割註⁽⁵⁾）

五歳より七歳に至り。御師範博士學架等に逢ふ。五明を學び盡し給ふ。

（顯真『太子傳古今目録抄』太子學相事⁽⁶⁾）

管見の限りにおいて、『大成経』以前の學智関連の記事は以上ですべてとなっている。『日本書紀』では、「覺智」という名前の人物が聖德太子の儒教の師となっていると記しており、『聖德太子伝暦』『太子傳古今目録抄』では共に「學架」という表記がなされている。それぞれ名前の表記が『大成経』のものと異なっている点が気がかりではあるが、「聖皇本紀」の記述と同様に、聖德太子の儒教の師であったという点で一致するため、恐らくは同一人物であると解釈してよいものと思われる。

上に引用した記述を改めて見ても、『大成経』以前の資料から得られる學智に関する情報は、名前と聖德太子の儒教の師であるという程度のもので、従来の聖德太子伝等においては然程重要な人物とは目されていなかったと考えられる。

それに対し「聖皇本紀」においては、それまでの非常に淡泊な記述とは打って変わって、オリジナルな記事でもって聖德太子が學智を招聘しようとしたことや、自らの師とした経緯が詳細に記述されている点に注目されよう。以下に、聖德太子と學智の間でどのような関りがあったとされているのかを一覧として示してみたい。

表一 「聖皇本紀」における學智関連記事

	記事の所在	主な内容
①	敏達天皇四年夏四月条	學智来朝
②	敏達天皇十三年三月条	聖德太子が學智に師事
③	敏達天皇十三年此時条	儒者の認識に対する聖德太子の反論（地獄説・輪廻説 e t c.）
④	敏達天皇十四年是時条（一）	法華經批判・聖道門
⑤	敏達天皇十四年是時条（二）	淨土教批判・淨土門
⑥	用明天皇元年秋七月条	『大学』『中庸』の独立
⑦	用明天皇元年是月条	聖德太子による儒学弘道と物部大連の妨害
⑧	崇峻天皇二年此年条	蓋天説・須弥山説と渾天説
⑨	推古天皇二年春二月条	神道学・儒学の興隆、造像・造寺の功罪
⑩	推古天皇十四年此年条	聖德太子の『孝経』『大学』『中庸』注釈
⑪	推古天皇二十七年是年条	古暦年卦占法

「聖皇本紀」にて學智が登場する記述を概観し、主としてどのような内容となっているかを端的に表すと前表のようになる。そしてこれらの記述において特徴的なこととして、詳細は後述するが、「學智（儒者）の意見に対する聖德太子の反論」と「聖德太子による儒教要素の展開」の二パターンの要素が存在することが読み取れた。

『聖皇本紀』において學智が登場する記事は全て、既に確認したように従来の太子伝等には一切見られない、『大成経』オリジナルの記事であることから、近世における社会的・思想的背景が強く反映されながら作成されたものであると考えられる。また「學智（儒者）の意見に対する聖徳太子の反論」という要素がいくつかの記述に現れていることから、『大成経』が出版される延宝七年（一六七九）以前に存在していた近世儒学者による排仏論に対する反論を行うという目的のために作成された記事である可能性も存在するように思われる。以降、近世前期においてどのような視点で排仏論が展開されたのか、またその論点について、「聖皇本紀」學智関連記事と関係があると考えられるものをいくつかピックアップしてみた。

三、近世前期（『大成経』以前）の仏教批判・排仏論

近世における排仏論には、様々な方面からの議論が存在していたことが先行研究にて明らかにされている。辻善之助は近世排仏論の内容を「思想の上より之を難するもの、政治の方面より觀たもの、經濟の側より議せるもの」⁽⁷⁾と大きく三つに分け、また柏原祐泉は、儒者による排仏論に「倫理主義に基づいて仏教の反倫理性、超俗的精神を否定すること」⁽⁸⁾、「経世論の立場、すなわち政治經濟上の政策論の立場で、仏教有害を論ずるもの」⁽⁹⁾、「科学的な立場での仏教批判」⁽¹⁰⁾の三つの特色を見出している。そしてそれぞれの中に、より個別具体的な議論が様々な存在し、上の表にまとめた學智関連記事の中にも記された仏教批判の要素も、『大成経』出版以前から主に儒者を中心に排仏論として展開されていた。

近世儒者の仏教批判に関しては、土田健次郎が「多くが中国の仏教批判の受け売りという印象が拭えず、社会的・經濟的側面の批判や彼我の風俗の差の強調に日本の歴史上の事例が持ち出されるということはあるが、日本的な独自の深化は感じられない」⁽¹¹⁾と指摘しているように、ある類型に嵌まったものであったかもしれない。しかし、

それに対する仏教側の護法論としての『大成経』の記述は、従来の聖徳太子観を覆すような新たな事績の創作なども相まって非常に独創的で興味深い内容となっている。

ここからは実際に、『大成経』出版以前に成立した仏教批判を含む文献と、「聖皇本紀」學問関連記事とを見比べながら、前者に対して後者がどのような論を展開しているかを確認していきたい。

○地獄説批判

天堂地獄之事。唯是浮屠之設へるを以て愚民を誘ふ。善を爲し惡を去る之意。而して實に中國は此陰府之事有ること非ず。尤も浮屠之僞を見る也。

(山崎闇斎『闢異』¹²⁾)

然を佛道にハ、地獄・極樂といへる、僞る教をたて、念佛またハ題目を唱れハ、極樂に往生し、となへざれば、地獄に入といへる事を、わけもなく實と信じ、父母臨終に及て、念佛・題目をたからかに唱へ、甚しきハ、念佛しや・題目をとなふる同行沙門を會、病人の枕に近づかせ、同音に念佛・題目を唱ると見えたり、斯あれハ、其病人平生念佛・題目のちからによりて、極樂に往生するとあやまれり

(熊沢蕃山『葬祭辨論』¹³⁾)

世に愚痴の人多ければ、ある事の方をばなき事とし、なきことの方をば有事とす。三綱五常の道、天道の善に福し、惡に禍し給ふ。目の前なる有ことの正しき事をば信ぜずして、地獄極樂と云なきことをば信じしたがふ者多し。異端の徒の人をまどはす所なり。

以上のように儒者による地獄説の批判内容の概要としては、地獄などというものは本来存在しないものであるのに、仏者は敢えてそういった概念を作り出すことで人々を欺き惑わしているのだという、その一点に尽きようかと思われる。

此時太子学智を宮に召て。告て訓て曰く。汝靈敏なり。故に拜して師と為す。又一世の因に非ず。汝既に宿命を失ふ。之を以て外道に同じ。還て大聖を誹るなり。他は數之を措く。獨り汝と之を論ず。(中略)地獄は佛の説なり。唯佛説のみに非ず。吾が神祇之を知て。説て以て底根と謂ふ。汝が聖人之を知て。亦説て黄泉を示す。聖人鬼神。何ぞ虚言を為ん。世尊は覺王。欺邪有ること無し加之汝が典に。天府と宜府と。其記多端なり。

(『先代旧事本紀大成経』聖皇本紀 敏達天皇十三年此時条)⁽¹⁵⁾

これに対して聖德太子は③敏達天皇十三年此時条で、「地獄」説は仏が説いたものであるが、日本の神話にも「底根」(底根之国)というものがあり、また漢籍にも「黄泉」や「天府」「宜府」という地獄説に類するものがあると思われ、指摘することで、地獄が存在することは広く認められている事実であり疑う余地はないと主張していると思われる。

○輪廻説・三世因果説批判

釋氏人死して鬼と爲り。鬼復人と爲ると謂ふ。是天地陰陽之氣。造化人鬼之理を明らかにせず。(中略)嗚呼釋氏。又死して精魂散らず。復父精母血を借り。以て其形體を生ずると謂ふ。此の如きは則ち父母之名。皆假

托之具。以て天下後世。不慈不孝之心を啓す。其心を忍び理を害する之言。亦何ぞ其繆妄するや。

(山崎闇斎『闢異』⁽¹⁶⁾)

人死する時には、本分色體分離して、色體はくちすたり、他身に入りかはる事あたはず、本分は本より不生不滅の體なれば、人生ずれどもかれは生ぜず、人死すれどもかれは死せず、我本分と成しものとして各別ならず、他身に又入といふ事なし。不生不滅の體なる故に、善惡のけがれをうくることもなく、善惡のけがれにひかれて、他身に入事なし。故に死て後又他身に生れかはるといふは皆虚説なり。

(向井元升『知耻篇』中)⁽¹⁷⁾

仏氏剃髮人倫を棄るは、輪廻を恐るれば也。天道輪廻なし。しかるを輪廻といへるはまどへり。(中略)むかし、釈迦、輪廻を見たるは、心眼病なり。後世の仏者、此心病を伝て輪廻ありと思へり。

(熊沢蕃山『集義和書』卷第十一 義論之四)⁽¹⁸⁾

儒者による輪廻説の批判も、地獄説に対する時と同様に輪廻転生というものは存在しない、あり得ないということが主張されている。山崎闇斎の『闢異』は、朱子学において、人が死んだ場合その「氣(魂)」は天に帰し、再び集まって戻ることがないという考え⁽¹⁹⁾に基づくもので、仏教の輪廻説のように死後にまた次の肉体に魂が宿って転生するという考えと相反するものである。

また向井元升の『知耻篇』では、仏語を用いながら人の精神は常在不変であると述べ、それ故に生まれ変わるということはないと言っていることに注目される。

輪廻は佛の説なり。何ぞ唯佛説のみならん。此に死し彼こに生し。彼に没し此に産す。舊跡勝て計ふべからず。汝は是学人。當に史法に。偽物を書かざるを知るべし。之を知ること乃自に在り。之を毀るも又自に在り。愚昧に非ずと為ること。又夫れ何ぞや。學智即十界を了して。歡喜して涙を流て退出す。

〔先代旧事本紀大成経〕聖皇本紀 敏達天皇十三年此時条⁽²⁰⁾

これに対しても聖德太子は③敏達天皇十三年此時条で、輪廻説も仏の説であるとしつつ、輪廻説の証拠となる生まれ変わりの事実などは数えきれないほど存在すると指摘し、輪廻転生などは存在しないという儒者の批判に対して回答している。

○浄土教批判

されども念佛の弊有事は又よく知べき也此世の貧賤飢寒にくるしむ者は早く死して極樂にむまるべしと云てみづからくびく、り水火にもあり又一たび念佛する力にて無量罪を消滅すと云て殊更にあしきことをする者もあり

〔林羅山『徒然草野槌』上之四⁽²¹⁾〕

主親をころしたる極重の悪人にも念仏の功力にては必極樂浄土へ往生するなど、教誨せり。其外いろ／＼さま／＼にことばを巧にし寓言をつくりて、人心をまどはし禽域へひき入、世教のさまたげとなる事、挙てかぞへがたし。

〔中江藤樹『翁問答』下卷之末⁽²²⁾〕

儒者は仏教の浄土教、特に悪人であっても念仏を唱えることで往生できるとする考えに対して批判していると考えられる。儒教において、社会的規範や道德観・倫理観を侵した悪人は悪人でしかないため、その悪人が善人と同じ結果を得られるとする教えに対して批判を向けるのは必然と言えようか。

是時学智。極樂の經を見るに。愚人罪人。當に往生を得べしと。是れ聖人の説に異して。其れ疑ふ所少なからず。之を左右の僧に問ふ。彼佛の願力なりと答ふ。尚を愚人悪人に依怙して。聖教を破るの旨を益す。愈惑て相疑ふ。太子之を聞き。乃ち学智を召て慰問して曰く。汝が宗に詩經有り。周公孔子の撰なり。其經何の旨をか説て。何の機を化すや。学智答て言ふ。詩は人を風諫す。太子告て曰く。汝唯詩の表趣を解す。未だ詩の本趣を解さず。詩は唯情に有り。未だ曾て理に在らず。猶を吾先神先皇。詠歌を以て。情を置くがごとし。吾と異と自ら一に至て。正誠にして虚妄を離れ。佛法何ぞ情法無し。念仏は情に在りて理に非ず。譬は風人の月花に我を抛ち。万邪皆忘て。聖理に偈らずして。情行を淨め。君子の情を成するが如し。念佛之道も。亦復是の如し。専ら彼の仏を念じ。唯往生を願ふ。一心不亂に。名を称して善尚を取らず況や惡をや。世妄を遠離し。又法理を離れ求ず。諸佛の情を成して修めず。菩薩の道を得る。理者の知らざる所。悟者の達せざる所なり。是の如き法の前には。智愚の論無し。上下の根無し。此に於て學智。念佛の道を會す。

『先代旧事本紀大成經』聖皇本紀 敏達天皇十四年是時条 (二)⁽²³⁾

それに対する聖德太子の回答は、④敏達天皇十四年是時条 (一) にて、直前に『法華經』を例に挙げた聖道門による自力成仏を説き、それに対して、続く⑤敏達天皇十四年是時条 (二) で、全く性質の異なる浄土門による他力成仏というものがあることを説くことで、浄土教の教えが人々を惑わす虚偽りではないと主張していると考えられる。

○造像・造寺批判

佛法のはじめて我朝につたはる事欽明天皇より濫觴して推古天王よりこのかたいよ／＼さかんなるゆへに君臣士民にいたるまで財産をつくし田園をすて、多くの寺塔を建立す天平年中に大寺をたて大佛をつくり天下の工を費し又諸國七道にも國分寺を作る其費すでに正税十分の五なり（中略）國の衰弊おしてしるべし

（林羅山『徒然草野槌』上之⁽²⁵⁾）

大殿大像は養教之具に非ざるなり今養ふべく教ふべきの民を率て之を寒餓し之を欺惑す之を君其君に非ずと謂ふなり

（林羅山『大佛殿』⁽²⁶⁾）

今民間の道路には、水に橋なく舟なき所多し。遊民みづから舟・橋を作て錢を取て人をわたす。貧なる婦女・童子はわたることを得ず。たま／＼民の自力にて橋をわたすといへども、かちの者さへわたるにあやうし。仏法の制にも過たる今の堂塔の十分一を損せば、天下の舟・橋時になるべし。

（熊沢蕃山『集義和書』卷第十二 義論之五⁽²⁷⁾）

これらの記述から、仏教者が立派な仏像や堂塔を建てることが人々を苦しめ、經濟を圧迫する原因となっているという認識が儒者の間で存在していたことが分かる。

二年。春二月。太子天皇に奏し。親ら神教經。宗徳經等の書を編み。初て神家の学を立つ。並びに学智に命じ

て。儒宗の学を興す。(中略)是先づ太子及び蘇我の大臣に詔して。三宝を興立せしむ。時に太子奏して曰く。像を造り堂を立るの功は。福田の第一なり。然も是の如くなりと雖も。自らの財宝を惜みて。財を國に懸け。州縣之畜を費し。其の役を民に懸け庶黎之憂を發すは。諸れ斯れ福に非ず。即ち是罪なり。佛之を受けず。天還て之を惡む。或は領者の益を欲し。偏に任を為し貨を棄つ。為佛の為に非ず。又庶の為に非ず。為を領の為と為す。天福を奪ひ禍を與へ。神利を變へ罰と成す。若し造立を能んと欲する者は。一束の役には五束を与え。百束には五百を棄と成す。一像成て。一縣潤ひ。一堂成て。一國富む。是太悲の佛心に應る。即ち至仁の天意に應ず。之に依り理合ひ。災滅し福を生ず。願を成し祚を護る。天皇之を聞き。群卿之を聴し。皆大に歡喜す。是時諸の臣連等。各君親之恩の為。競て。佛殿を造り。即ち焉を寺と謂ふ。

〔『先代旧事本紀大成經』聖皇本紀 推古天皇二年春二月条〕⁽²⁸⁾

⑨推古天皇二年春二月条は、學智の論に対する聖德太子の反論という形を採つてはいないものの、明らかに造像・造寺によって人々や社会に与える影響といった部分に配慮しつつ、それらを建立することの功德を説くという形で記述されていることがわかるものである。従つて、こちらも排仏論に対する一つのアンサーとして作成されたものと見做し得るだろう。

○渾天説と蓋天説・須弥山説

此年。太子學智に問て曰く。天の旋轉の状。汝が学は如何。学智答て白す。臣が國之学。元と陳に学ぶ。然るに二説有て其の一は。天輪日月。西より入て地に於し地より出て東に於す是我正と為し学ぶ所なり。其の二は。北より東に旋り。東より南に南より西に西より北に是れを異と為す。太子之を聞き。喟然として嘆して曰く。

汝が正と為し学ぶ所是れ後儒の見のみ。其れ非と為す所の者は。是れ先聖の説なり。(中略)蕃國の真至已に以て横と云ひ。西天の古佛。吾朝天尊。皆方に横と云ふ。何ぞ多聖を疑ひ。一凡を信んや。神聖は視言し。凡敏は議言す。這一ち是の如し。餘の千顧みるべからん。学智信伏頓拜して退出す。

『先代旧事本紀大成経』聖皇本紀 崇峻天皇二年此年条⁽²⁹⁾

また最後に、⑧崇峻天皇二年此年条にて行われていた、聖德太子と学智の天の動きに関する議論について見てきたい。ここでは学智の認識においては、天は西から地に入り、東から地上に出てくるという所謂「渾天説」的宇宙論を正しいものとしていることがわかり、また反対に天が北から東、東から南、南から西、西から北というように右回りに横回転するという「蓋天説」的宇宙論を誤りとしている⁽³⁰⁾。そして聖德太子はこうした学智の認識に対して、「蓋天説」のような天が横向きに回転するという考えこそが正しいと主張している。

では近世前期において、宇宙観に関する議論はどのようなものがあつたのか。

サレハ、月日ハ湏弥ノ腰ヲ、北ヨリ東南ヘ向テ横ヘ回ルトイヘリ。湏弥山ナケレハ、此支皆偽ト云ナカラ、先、爰ニハ、湏弥ヲ有物ニシテ見時ハ、横ニハ回ラス、明カニ東ヨリ出テ、頭ノ上ヲ通り、西ニ入ヌハ、朝夕見玉ハスヤ。何シニ横ニ回ルトハ説レタルヤ。

(不干斎ハビアン『妙貞問答』上巻 仏説三界建立ノ沙汰之⁽³¹⁾)

且又終に物皆上下有るの理を知らず。彼地中を以て下と爲し。地形を圓と爲す。其惑ひ豈に悲しまざるや。朱子所謂天の半ば地下に繞る。彼之を知らず。

不干斎ハビアン（31）の『妙貞問答』は、キリスト教の立場から神儒仏三教に対する批判を行つた書物である。引用した箇所では、仏教でいう「須弥山説」を批判しながら、日月がその須弥山の中腹を横向きに回るとするような仏教的宇宙観を否定している。

林羅山の『排耶穌』は、彼とキリスト教者・不干斎ハビアンによる対話を記したもので、引用した箇所のように天体に関する議論が行われている。これによれば、林羅山は朱子の言葉を引き、天の半分が地の下にあるということとを述べていることがわかる。これはつまり、天球の中心に方形の地が存在するという「渾天説」に則つたものであると考えられる。

⑧崇峻天皇二年此年条では、林羅山と同様に學智も「渾天説」の立場を取り、聖德太子はそれと異なる「蓋天説」の立場を取っているということは非常に興味深い。これについては『妙貞問答』で、仏教の「須弥山説」において日月が須弥山の周りを横に巡るという考えが批判されているように、「蓋天説」と「須弥山説」の間には天および日月の回転という点において共通するものがあることが知られる。従つて聖德太子は、「聖皇本紀」においては「須弥山説」に立つ仏教者として描写されていると解釈できるのではないか。それ故に、近世儒者の抱く「渾天説」的宇宙観に対する反論を行っているものと考ええる。

また近世には、「須弥山説」に基づく仏教天文学を提唱した「梵曆運動」が展開されていたことが広く知られている。⁽³³⁾このようなムーブメントに対して『大成経』が何らかの影響を及ぼしたか否かについては未だ明らかになっていないが、両者の因果関係については今後注意深く検討していく必要があると考えている。

四、新たな聖徳太子観の創出

ここまでは「聖皇本紀」學問関連記事に見える儒仏論争的な内容について見てきたが、以降は「聖徳太子による儒教的要素の展開」といった内容について考えていきたいと思う。

聖徳太子は日本に仏教を広めた聖人として知られ、今日まで仏教の視点から語られることが圧倒的に多かった。また中世に展開した「根本枝葉花実説」を中心に、神道との関係から論じられることもある存在だが、儒教との関係から論じられることは、それほど多いとは言えない。先行研究において「十七条の憲法」を論ずる際にしばしば、そこに儒教的要素が含まれていることに言及されるという程度である。

それに対して「聖皇本紀」では、積極的に聖徳太子と儒教を関わらせ、従来の聖徳太子観にはなかった、新たな聖徳太子観を創出しようとする意図が読み取れる記述が存在している。

○『大学』『中庸』『孝経』

元来『礼記』中の一編であった『大学』と『中庸』をそれぞれ独立の經典とし、『論語』『孟子』と並べ「四書」としたことは、宋代の儒者・朱子（一一三〇～一二〇〇）の業績の一つとして知られている。⁽³⁴⁾ また朱子は『四書集注』を著し、その中で『大学』『中庸』に対する注釈を加え、『大学』は「初學徳に入る之門也」⁽³⁵⁾ として「四書」を学ぶ上でまず初めに取り組むべきものとした。そして『中庸』は「中庸も亦讀み難し三書を見て後方に宜しく之を讀むべし」⁽³⁶⁾ と「四書」の最後に学ぶべきものとされた。これは⑥用明天皇元年秋七月条に「秋七月。太子奏聞して以て詔を奉る。礼経より大学を出て。孝経に比べ一経と為して。初学をして之を習はしむ。後日又中庸を出して。太學に次て之経を為す。初學之熟する者をして。理及び行の辟を正して。習て之を推て之を延ばさしむ」⁽³⁷⁾ とある

ように、聖徳太子が『大学』『中庸』の学序を定めたとする記述と合致する。

加えて『孝経』についても朱子は『孝経刊誤』を著し、それまでの『孝経』のテキストを「経」（『孝経』オリジナルな部分）と「伝」（後の儒者による付会の部分）とに分けることで、『孝経』の核たる部分を明確にしようとする試みを行って⁽³⁸⁾もいる。

このことから、⑥用明天皇元年秋七月条にて聖徳太子が『大学』『中庸』を『礼記』から独立させたという記事や、⑩推古天皇十四年此年条にて聖徳太子が『大学』『中庸』『孝経』の解を著したという記事は、明らかに朱子の存在とその業績を意識したものであると考えられる。これは中国より先んじて日本で聖徳太子が行っていたとする、朱子学者たちに対してかなり挑発的な態度で創作された太子の新たな事績であると考えられる。すなわち近世の朱子学者が依拠すべき学問の基礎は、早く日本で聖徳太子によって作り出されたものであるから、例えば林羅山が『本朝神社考』にて行ったような、自らの学問の源流的位置にある聖徳太子を非難することに対する非合理性を主張しているとも考えられる。

○古暦年卦占法

是年。太子易経を謂て曰く。此の書は二真の作にして天理の躰なり。伏羲八卦を造る。神農其卦を疊ね。六十四卦を造る。又二至出て天理の用を作す。黄帝筮を作し。禹王洛に依て納甲を造る。又二聖出て。天理の断を釈す。文王卦を説き。周公爻を説く。吉凶禍福。豫め知て迷ず。事を決して疑ひ無し。理を尽して危無し。然して是如なりと雖も未だ年卦を説ず。只時の用を以て變易に在ればなり。寡人熟天理を見るに。七百七万。天年卦を具す。一年に二卦。一月に一爻なり。年は立春に始り。月は節日に始る。

（『先代旧事本紀大成経』聖皇本紀 推古天皇二十七年是年条⁽⁴⁰⁾）

①推古天皇二十七年是年条には、聖徳太子によって、それまでの易学では説かれなかったという「年卦」なる概念が生み出されたことが記されている。そしてその「年卦」については、「一年に二卦を配当し、また一月に一爻を当てる」というものであると説明されている。この「聖皇本紀」の記事にあるだけの情報では、何を意味しているのかほとんど理解し得ないが、ここに記された内容に関連する『古暦』を用いた占いについては奈良場勝の先行研究が存在している。

奈良場は「すなわち「古暦」は、ある人の生年月日時における情報をもとに吉凶を占う暦方式の占書として成立した書物かも知れないということである。近世独特の暦を用いた占である」と指摘し、『古暦』は一般的な未来の暦ではなく、過去の暦であり、占いのために製作されたものである可能性を挙げている。そして現存する『古暦』刊本⁽⁴⁾を確認すると、その年のページ毎に『易経』に見える六十四卦の内の二つが割り当てられていることがわかる。つまりこれが、「聖皇本紀」の記事に見えていた「一年に二卦を配当」するということであると解される。加えて易における六十四卦は六本の爻によって成り立つものであり、一年に二卦が当てられているということは、合計で十二の爻が存在することになる。そしてその爻の一つ一つが一年の一月毎に割り当てられるということになるから、こちらにも「聖皇本紀」の記述と合致する。

従って「聖皇本紀」における「年卦」の記事は、近世に出版された『古暦』の存在を前提に、それに基づく占いを、早くに聖徳太子が行っていたという新たな事績を作り出すためのものと考えられる。

古暦本卦ノ定例ハ生年ノ運卦ニテ生月ノ爻ヲ見テ本卦ノ當爻トシ周易ニテ其卦ノ辞象象爻象ヲ見テ吉凶ノ大槩ヲ考ヘ終レ身マテ慎ミ守ルヘシ

(富岡秀将『新刊古暦便覧大全』本卦之定例⁽³⁾)

そして『古暦』を用いた占い方については、富岡秀将著『新刊古暦便覧大全』⁽⁴⁾にて初めて詳細な説明がなされている。引用した箇所を参考としつつ簡単に説明すると、まず『古暦』を開いて自らの生まれた年に六十四卦の内どの二つが割り当てられているかを確認する。そして自身の誕生月に当たる爻がどちらの卦のどこに相当するのかを確認し、その後、『易経』でその卦や爻の解説を読むというものである。詳細な占いのやり方については、奈良場が解説しているためそちらを参照されたい。⁽⁵⁾

ここで注目すべきなのは、「聖皇本紀」において、なぜ聖徳太子を通して『古暦』を用いた占いについて述べる必要があったのかということである。その理由について考え得るものとしては、『古暦』出版に関係した人物が『大成経』偽作にも関わっていた可能性や、儒教に関係する事柄に深く精通している聖徳太子というイメージを作り上げるため等が思い浮かぶ。しかし前者に関しては『古暦』を製作・出版した人物がだれであるのか不明である点や、「聖皇本紀」の記事だけでは具体的な『古暦』占いのやり方がわからない点から、その可能性もないとは言えないが、やや根拠に欠ける。従って私は、神儒仏三教一致の思想を説く『大成経』において、儒教とあまり関係が深くなかった聖徳太子のイメージを一新するために、敢えて儒教において重要な要素である「易」に精通した聖徳太子像を形成しようとしたのではないかと考えるのである。

五、後世への影響について

ここまで「聖皇本紀」學智関連記事についての分析を行い、わかったこととしては、

- ① 聖徳太子と學智をそれぞれ仏教と儒教を代表する人物と見做した上で、主に儒者の仏教批判に対する反論を行うこと

- ② 『大成経』において聖徳太子による神儒仏三教一致を説く上で、それまでの仏教中心の聖徳太子のイメージを、

儒教に対しても深く精通した人物へと変化させること

以上の二つの目的のために、『大成経』撰者は従来の太子伝等ではほとんど重要視されてこなかった學智という存在と関わらせながら、新たな聖徳太子觀を形成しようとしたものと考えられる。

では「聖皇本紀」にて示された、儒教的要素にも通達した聖徳太子の存在は後世に対してどのような影響を及ぼしたと考えられるのか、その一端を見てみたい。

本朝古曆ノ從來ヲ按スルニ推古天皇元^{マヤ}二十七年聖徳太子初メテ易ノ積年ノ卦ヲ演説ス其以来古曆ヲ作テ年卦ノ使用トス先代舊事本紀二見ヘタリ一年二卦ヲ配當シテ六十四卦三十二年ニ終ル此天下ノ運卦ニシテ人々ノ本卦ニ非ス然ル二年卦ヲ以テ本卦トナスコト其考證ヲ見スト云ヘ凡非理之中ノ理也

（富岡秀将『新刊古曆便覽大全』古曆本卦⁽⁴⁶⁾）

前章で見てきた富岡秀将の『新刊古曆便覽大全』（以下、『大全』）では、明らかに①「聖皇本紀」推古天皇二十七年是年条の記事の存在が意識されており、その影響から『古曆』を用いた占いの詳細な解説を行ったことが想像される。

また『大全』の自序には「一日書肆来ること有り從容として予に語つて曰く本朝固有之古曆を見るに毎歳二卦を附屬す讀者其本卦爲ることを知ると雖も未だ皆て六爻配當變互之起卦を知ず希くは之を明して童蒙之徒猶曉し易すからしむるがごとくして梓に壽せんと欲す余固辭す然れども數請て止まず故に其需に應ず⁽⁴⁷⁾」とあり、ここから恐らくは『大成経』が出版されたことによって、聖徳太子によって提唱されたとする占い（本稿では仮に「古曆年卦占法」と呼称する）が人々に周知されることとなったが、既に見てきたように「聖皇本紀」の記事だけではその占いの詳細なやり方がわからなかった。そのため『大全』の著者である富岡秀将の所に書肆が訪ねてきて、人々が

「六爻配當變互之起卦を知」らないためにその解説をしてほしいと頼まれたという背景が存在していたことが明らかになってきたように思う。

従ってここから、『大成経』が偽書とされた後にも聖徳太子が説いた古暦年卦占法は人々の間で受容されており、その詳細な解説書に対する需要から『大全』は出版に至ったと理解できるのではないかとと思われる。

私の考えとしては、『大成経』出版以前の『古暦』を用いた占いの段階では、恐らくある程度占いや易学に造詣のある専門家の間など、限られた範囲で用いられていたのではないかと思う。そして後に『大成経』が出版されると、その影響で占いや易学に対してあまり知識を持たない人々も『古暦』を用いた占いに関心を持つようになった。それ故に、新規に『古暦』の占いに触れる人々のための解説書として『大全』は著されたのではないかと考えるのである。『大全』の自序で、書肆がわざわざ『古暦』占いの解説書を出版したいと願っているということも、『大成経』の影響の大きさを推量する要素の一つとなろう。

『聖皇本紀』に、「推古天皇の二十七年、太子は『易经』について次のようにいった。この書は二真人の作ったもので天理の本体である。（中略）けれども、まだ年卦については説明されていない。つくづく天理七百七万の天年を見るに、卦を具えるのは一年に二卦、一月に一爻、年は立春に始まり月は節日に始まり、積年の卦は乾・坤の双に始まって、既済・未済の双で終っている。

（寺島良安『和漢三才図絵』巻第五 暦占類⁽⁴⁸⁾）

江戸時代の百科事典である『和漢三才図絵』においても「聖皇本紀」の記事が引用され、聖徳太子による古暦年卦占法が紹介されている。ここからも「聖皇本紀」に説かれた内容や、聖徳太子が編み出した占いの方法などが人々

に受容されていた可能性が垣間見え、儒教的要素にも精通した聖德太子観もまた、『大成経』以後、十八世紀頃には既にある程度定着しつつあった可能性がある。

然るに此術、早く皇國に傳へて、古き年代記の類、近くは循環曆と云ふ物に、其式を載せれど出所なく、古曆便覧の舊刻、中根元圭が凡例に、凡以^二六十四卦^一、毎年配當之說、未^レ考^レ所^二由來^一、然不^レ加^二自己妄意^一、只隨^二舊例^一而已と云ひ、再刻の本には、推古天皇御宇、聖德太子演^二說之^一矣、見^二于先代舊事本記^一と云へり。然れば此人も乾鑿度^③に其本術ある事を知らず、舊事大成經の偽書なる事をも知らず據とせしなり。偕てしか其出所の吉凶を斷わるに、妖言誣説の多かるを見るに得堪ねば、今周曆を論ずる因に、其本來をも知しめむと欲るなり。見む人煩はしとて等閑に見過すこと勿れ。

(平田篤胤『三曆由来記』中 割註^④)

平田篤胤の『三曆由来記』によれば、一年に二卦を配当し一月に一爻を配するといふ占いの方法は、色々な書物で紹介されてはいるもの^⑤の、そもその出典が明らかではなかった。『新撰古曆便覧』の中根元圭の凡例^⑥にもその由来はわからないとされており、また『増續古曆便覧』の凡例^⑦には聖德太子が説いたものとして説明されている。誰もその正式な由来を知らなくとも世の中に流布し、占い師や陰陽家などによって占いが行われていた。篤胤はそれに堪えかねて『周易乾鑿度』にその基本形が存在していることを知らしめたいとしている。

以上より『古曆』を用いた占いと共に、それが聖德太子の事績に基づくものであるという認識がされていることがわかる。また篤胤が指摘しているように『周易乾鑿度』の中にその原型と見られるような記事が実際に見られる^⑧

ことから、「聖皇本紀」の該当記事を著した人物は『周易乾鑿度』の記述に基づいている可能性があることにも注目される。

○賢聖瓢説話

また儒教に精通した聖徳太子像の形成という側面から「聖皇本紀」の記事を見た場合、決して無視することのできない、重要かつオリジナルな記事が存在している。

是月。狹貫國。賢聖像の瓢を獻る。孔夫子と。又榮啓期と。四皓と。鬼谷先生と。蘇秦と。張儀との九像有り。並びに楷字の銘。及び其好木像有る。瓢の長け五寸。五行の徳に合ふ。是れ其羽香縣主兄丸が園にを生ず。此月朔日。乃ち龍馬有り。其藁を咋ひ切る。焉を兄丸に與ふ。其日其時之を考るに。方に太子の産時に中れり。天皇奇と為し。是を太子に賜ふ。太子之を受け。始て快咲したまひて。始て右の手を開きたまふ。掌中に一の瓢實有り瓢を闔ば中に。一の肉有り肉を破るに中に。核跡有り。焉を宛つれば更に差はず。知ぬ此の瓢の實を握る。諸人之を謂ふ。斯這王子。聖人爲るの瑞なり。又道此の王子は。當に儒宗を弘むべき瑞なり。

（『先代旧事本紀大成経』聖皇本紀 敏達天皇元年是月条）⁵¹

引用した敏達天皇元年是月条の要点は、聖徳太子が孔子等の賢聖の像が浮き上がった不思議な瓢箪の種を握っていたことが分かると、人々は聖徳太子こそが聖人であり、儒教を広めるべき人物であると信じるようになったというところにある。

このような聖徳太子が日本における儒教の祖であるとする「聖皇本紀」の記述は、儒者の仏教批判に対する反論の

材料としても役立てられている。

太子是を受けて始めて右の御手を開たまふ掌中に一の瓢あり（中略）三来三種の奇瑞三道を興隆したまふ瑞相也此三種共に今に南都法隆寺の珍宝たり道春是を聞け汝が儒道の大祖たること分明也然を其流を汲て源を汲すや

（『南光坊林道春殿中間答』⁽⁵⁶⁾）

林羅山と南光坊天海の論争に仮託したと思しき『南光坊林道春殿中間答』では、「聖皇本紀」の記事を参照しつつ、聖徳太子が日本における儒教の祖でもあると主張し、林羅山の聖徳太子批判を退けようとしていることが明らかである。先に見てきた、中国の宋代において体系化された「四書五経」を中心とする儒学が、日本では既に聖徳太子によって形成されていたとする「聖皇本紀」の記事と合わせて考えると、『大成経』においては、聖徳太子こそが日本における神儒仏三教の祖であると主張しようとする意図が強く表れているように感じられる。

皇子降誕のその日より、曾て左右の御手をひらき給はず。御父豊日尊を始め奉り、心ならずおはせしに、今日瓢を奉るに及んで、莞爾と笑を啣み、襁褓の中より右の手を出し、藁の手に取らんとし給ふに、此時右の手忽然として開け、御手の中より一つの瓢の仁を落されたり。（中略）正しく聖人降誕の奇瑞、乾圖を握つて生るとは、是等の事をや申めり。此瓢後の世まで傳はり、初笑の瓢とも、又は賢聖の瓢とも稱へ、大和國法隆寺に傳へたり。扱かの瓢の人物は、孔子、榮啓期、鬼谷子、蘇秦、張儀、東園公、綺里季、夏黄公、甬里先生と九人の圖なりと云へり。

（若林葛満作・西村中和画『聖徳太子伝図会』⁽⁵⁶⁾）

また仮名書き・絵入りの読本である『聖徳太子伝図会』にも、「聖皇本紀」の記事をベースにした内容が存在している。このことから『大成経』の影響力の大きさが窺えると共に、「聖皇本紀」において新たに創出された聖徳太子の事績が、後世の人々にも自然に受け入れられている様子が垣間見える。

この『聖徳太子伝図会』については湯浅佳子が『大成経』と関連付けた研究を発表しており、『大成経』由来の記事が『聖徳太子伝図会』を介しつつ、後世に広く受容されていたことを明らかにしている。⁽⁴⁷⁾

六、結論

本稿では、従来の太子伝等ではあまり重要視されていない印象のあった學智という人物にスポットを当て、彼が近世『大成経』においてはどのような役割を与えられた人物として描かれているのかを、「聖皇本紀」學智関連記事を中心に読み解いてきた。

その結果、學智は聖徳太子の儒教の師であったということから、『大成経』においては近世の儒者を代表する人物として見立てられ、また仏教に対する批判的意見を述べる人物として描き出されていたことを明らかにした。加えて「聖皇本紀」における學智と聖徳太子との交流のシーンでは、學智の仏教批判に対して反論する聖徳太子の様子が示されていることにも注目された。これは明らかに聖徳太子をして仏教者の代表的立場から、近世に盛んに説かれた排仏論に対する反論を行わせようとする『大成経』撰者の思惑が看取されるものである。従って「聖皇本紀」における學智の役割とは、近世儒者による排仏論の代弁者に他ならないものであると考えられる。

また『大成経』では、學智を通じて語られる近世儒者の思想に対する反論を行うために、従来の太子伝等にはない新たな聖徳太子の事績を創作し、仏教だけではなく儒教にも精通した聖徳太子観を形成しようとする意図が存在することにも言及した。これにより『大成経』撰者は、聖徳太子を儒者が依拠すべき学問の基礎を作り上げた人物

として打ち出そうとした。つまり近世にしばしば非難の対象とされた聖徳太子は、近世の儒者たちが依拠すべき質問の源流に位置する人物であると主張することで、聖徳太子への批判を退けつつ更なる偉大性の高揚を図ったものと思われる。

以上のように、『大成経』には近世初期の排仏論に対する仏教側の反論という要素が存在することを明らかにできたとと思う。従って私は、『大成経』という資料を近世儒仏論争史を語る上でも意義のあるものと位置づけたいと考えるのと同時に、今後も更に『大成経』本文の読解を進め、『大成経』に表れた思想が後世の人々にどのように受容されていたのかという問題に迫っていきたいと考える。

注

(1) 本稿において「聖皇本紀」の記事は、お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』延宝九年刊本(三九冊、一―三八巻存、請求記号：D11/1338/138、国書データベース公開画像)を参照する。引用記事が複数のページにまたがる場合は、その記事の始まりの部分をURLと紐づけた。以下、『大成経』と省略。

国書データベースURL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100260508/1?ln=ja>)

また本稿における引用資料は、一部を除き、原漢文のものは全て書き下し文に改め、特に重要と思われる記述には適宜傍線を附した。

(2) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十五 六丁オ

国書データベースURL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100260508/1184?ln=ja>)

(3) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十五 十五丁オ・ウ

国書データベースURL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100260508/1193?ln=ja>)

小笠原春夫校注『続神道大系 論説編 先代旧事本紀大成経（二）』神道大系編纂会 一九九九年では、敏達天皇十三年の記事とされ、お茶の水女子大学附属図書館所蔵の延宝九年刊本では敏達天皇十二年とされている。後者では一部乱丁が認められるため、この年代に関しては、前者の続神道大系本に拠った。

- (4) 『新訂増補国史大系 第一卷下』吉川弘文館 一九六七年 一三六頁
- (5) 『大日本仏教全書 第七十一巻』財団法人鈴木學術財団 一九七二年 一二六頁
- (6) 『大日本仏教全書 第七十一巻』財団法人鈴木學術財団 一九七二年 二七七頁
- (7) 辻善之助『日本佛教史 第十巻 近世篇之四』岩波書店 一九七〇年（初版：一九五五年） 二頁
- (8) 柏原祐泉『近世の排仏思想』（『日本思想大系五七 近世仏教の思想』岩波書店 一九七三年 五二〇頁）
- (9) 同右 五二二頁
- (10) 同右 五二四頁
- (11) 土田健次郎『近世儒教と仏教―閩齋学派を中心に』（日本仏教研究会編『日本の仏教』第Ⅱ期・第一巻 仏教と出会った日本』法蔵館 一九九八年 一一〇頁）
- (12) 『日本思想闘諍史料 第一巻』名著刊行会 一九六九年 一九頁
- (13) 『神道大系 論説編二十一 熊沢蕃山』神道大系編纂会 一九九二年 一五七頁
- (14) 『日本思想大系三〇 熊沢蕃山』岩波書店 一九七一年 三九四頁
- (15) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十五 十七丁ウ、二十丁ウ
国書データベース URL (<https://kokushonij.ac.jp/biblio/100260508/1196?ln=ja>)
こちらも年代は続神道大系本に拠った。
- (16) 『日本思想闘諍史料 第一巻』名著刊行会 一九六九年 一七・一八頁

- (17) 『海表叢書 第一卷』更生閣書店 一九二七年 四六頁
- (18) 『日本思想大系三〇 熊沢蕃山』岩波書店 一九七一年 二一九頁
- (19) 国文学研究資料館蔵『朱子語類』卷三 十九条(刊本、国文研蔵請求記号：ワ3-219.1-46、国書データベース公開画像)
卷三 五丁オ・ウ

国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/200014066/110?ln=ja>)

「人の生する所以は精氣聚ればなり人只許多の氣有りて湏く箇の盡る時有るべし【明作録して云く鑿家に所謂陰陽升降せずと云ふ是なり】盡れば則魂氣は天に歸し形魄は地に歸して死す(中略)然も已に散る者は復聚らず釋氏却て謂ふ人死して鬼と為る鬼復た人と為ると此の如んば則天地の間常に只是許多の人来来去去して更に造化に由て生せざるなり必ず是の理無ん」

- (20) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』卷三十五 二十丁ウ～二十一丁オ
国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100260508/1199?ln=ja>)
- (21) 『國文注釋全書 第十一卷』すみや書房 一九六八年再版 六〇頁
- (22) 『日本思想大系二九 中江藤樹』岩波書店 一九七四年 一二九頁
- (23) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』卷三十五 二十八丁オ～二十九丁オ
国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100260508/1207?ln=ja>)
- (24) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』卷三十五 二十七丁オ～二十八丁オ
国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100260508/1206?ln=ja>)
- (25) 『國文注釋全書 第十一卷』すみや書房 一九六八年再版 一〇頁
- (26) 京都史蹟會編『林羅山文集 完』弘文社 一九三〇年 六六三頁

- (27) 『日本思想大系三〇 熊沢蕃山』 岩波書店 一九七一年 一二三〇頁
- (28) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十七 三丁ウ、四丁ウ、五丁オ
国書データベース URL (<https://kokushonij.ac.jp/biblio/100260508/1244?ln=ja>)
- (29) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十六 四十六丁ウ、四十七丁オ、四十七丁ウ
国書データベース URL (<https://kokushonij.ac.jp/biblio/100260508/1229?ln=ja>)
- (30) 「渾天説」または「蓋天説」の詳細については、数内清責任編集『科学の名著2 中国天文学・数学集』朝日出版社 一九八〇年に詳しい。
- (31) 西田長男「天理図書館所蔵吉田文庫本『妙貞問答』」(『ビブリア 五七号』一九七四年 三〇頁)
- (32) 『日本思想闘諍史料 第十巻』名著刊行会 一九六九年 一一五頁
- (33) 岡田正彦『忘れられた仏教天文学 一九世紀の日本における仏教世界像』法蔵館 二〇二四年(初版はブイッソ
ンリューションより二〇一〇年)
- (34) 島田虔次『新訂中国古典選 第四巻 大学・中庸』朝日新聞社 一九六七年 四頁
- (35) 朱熹『大学(朱熹章句)』(『漢文大系 第一巻』富山房 一九七二年増補版 五頁)
- (36) 国文学研究資料館蔵『朱子語類』巻十四 三条(刊本、和古書請求記号:ワ3-219-1、46、国書データベース公開画像)
巻十四 一丁オ・ウ
- (37) 国書データベース URL (<https://kokushonij.ac.jp/biblio/200014066/337?ln=ja>)
お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十六 三十二丁オ
国書データベース URL (<https://kokushonij.ac.jp/biblio/100260508/1214?ln=ja>)

- (38) 緒方賢一「孝経刊誤」と朱子」（『集刊東洋学 第八一号』一九九九年 五六頁）
- (39) 「聖皇本紀」推古天皇十四年此年条に、「時に太子。三経の解を製し。三月にして事成る。製已て之を学哥に給ふ。学哥拜見て信伏す」とある。

お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十七 二十三丁オ

国書データベース URL (<https://kokushonijia.jp/biblio/100260508/1263?ln=ja>)

- (40) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十八 五十七丁ウ～五十八丁オ

国書データベース URL (<https://kokushonijia.jp/biblio/100260508/1301?ln=ja>)

- (41) 奈良場勝『近世易学研究―江戸時代の易占―』おうふう 二〇一〇年 一九六・一九七頁

- (42) 国立天文台蔵『古暦（仮題）』刊本（デジタル請求記号：DIG-NAOJ-00291' 国書データベース公開画像） 一二丁オ

国書データベース URL (<https://kokushonijia.jp/biblio/100265364/3?ln=ja>)

- (43) 東北大学附属図書館蔵、富岡秀将『新刊古暦便覧大全』元禄二年刊本（藤原文庫 3847' デジタル請求記号：DIG-

THKW-06766' 国書データベース公開画像） 卷之上 四丁オ

国書データベース URL (<https://kokushonijia.jp/biblio/100237923/7?ln=ja>)

- (44) 複数存在する『古暦』を發展させた書物の内の一つ。後出の『新撰古暦便覧』『増續古暦便覧』も同様。『古暦』およびその發展形としての書物群の書誌は、奈良場勝の前掲書に詳しい。

- (45) 奈良場勝 前掲書 二二一～二二六頁

- (46) 東北大学附属図書館蔵、富岡秀将『新刊古暦便覧大全』元禄二年刊本（藤原文庫 3847' デジタル請求記号：DIG-

THKW-06766' 国書データベース公開画像） 卷之上 二丁ウ

国書データベース URL (<https://kokushonijia.jp/biblio/100237923/6?ln=ja>)

- (47) 東北大学附属図書館蔵、富岡秀将『新刊古暦便覧大全』元禄二年刊本（藤原文庫 3847、デジタル請求記号：DIG-THKW-06766、国書データベース公開画像） 自序 一二オ・ウ
- 国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100237923/3?ln=ja>)
- (48) 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注『東洋文庫四四七 和漢三才図会 一』平凡社 一九八五年 三六〇・三六一頁
- (49) 『新修平田篤胤全集 第十二巻』名著出版 二〇〇一年第二刷 三四三・三四四頁
- (50) 例えば、篤胤も挙げている『循環暦』。
- 名古屋大学附属図書館蔵、小泉松卓撰『循環暦 五巻初巻一卷』〔三十九〕周易年卦循環之圖、〔四十〕周易六爻配月
定法（五冊、享保二年刊本、函号：449.8 Ko-(A)・神皇、デジタル請求記号：DIG-NAGO-10106、国書データベース公開
画像） 巻三 四十一丁ウ～四十二丁ウ
- 国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100301555/147?ln=ja>)
- (51) 東北大学附属図書館蔵、中根璋『新撰古暦便覧』貞享四年刊本（藤原文庫 3836、デジタル請求記号：DIG-THKW-04429、国書データベース公開画像） 凡例 一丁ウ
- 国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100237906/3?ln=ja>)
- (52) 東北大学附属図書館狩野文庫蔵、中西如環編『増續古暦便覧』刊本（狩 7-31631-1、デジタル請求記号：DIG-THKK-7711、国書データベース公開画像） 四丁ウ～五丁オ
- 国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100330502/7?ln=ja>)
- (53) 『周易乾鑿度』巻下（『景印文淵閣四庫全書 第五三冊経部四七 易類』臺灣商務印書館 一九八三年 八七五頁）に、
「二卦十二爻を一歳に暮す」という文言が見えている。
- (54) お茶の水女子大学附属図書館蔵『先代舊事本紀 72巻目録1巻／「潮音等撰」』巻三十五 三丁ウ～四丁オ

国書データベース URL (<https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100260508/1182?ln=ja>)

- (55) 『南光坊林道春殿中間答』元治元年写本（請求記号：210.52-Te146n^{*} 国立国会図書館デジタルコレクション公開画像）
四十二丁オ・ウ

国立国会図書館デジタルコレクション URL (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2541623/1/43>)

- (56) 古谷知新編『日本歴史図会 第一輯』國民圖書 一九二〇年（請求記号：399.3^{*} 国立国会図書館デジタルコレクション）
公開画像） 九七頁

国立国会図書館デジタルコレクション URL (<https://dl.ndl.go.jp/pid/965866/1/56>)

- (57) 湯浅佳子「聖徳太子と瓢箪——『先代旧事本紀大成経』から『聖徳太子伝図会』へ——」（『日本文学 四七巻八号』一九九八年）